とっておきの東北海道

今回は初めての趣向として、東北海道に在住されているお三方の会員にそれぞれの東北海道と植物についてご寄稿いただきました。範囲が広いので、十勝、釧路・根室、オホーツク海側に分けて、各地域をご紹介いただきました。また、写真はグラビアコラボとして巻頭に掲載しています。(編集部)

十勝

実は自然の少ない十勝地方

浦幌町　持田　誠

十勝地方は、西を日高山脈、北を大雪山系から北見山地、東を白糠丘陵や阿寒山地、そして南方を海に囲われた範囲に位置し、こうした地形条件によって他の地域と隔たれた地域である。江戸時代は東蝦夷地に含まれ、松前藩および仙台藩の警護が置かれた時代は、和人の活動区域はほぼ太平洋沿岸域に限られ、広尾を中心にトカチと呼ばれた。1869(明治2)年に北海道が定められると7郡を擁する十勝国となり、内陸部の開拓が進んで1897(明治30)年には帯広に河西支庁が置かれた。1932(昭和7)年に河西支庁から十勝支庁と改称され、1948(昭和23)年に、それまでは釧路地方とされていた足寄郡足寄村・陸別村を編入して、現在の姿となった。

いま、十勝地方と呼ばれている地域のイメージは、内陸部のまったいらな農村景観である「十勝平野」のイメージである(図1)。だが、トカチという地名は沿岸部の地名で、かつての十勝川(現浦幌十勝川)の下流域を指す言葉であった。広尾にトカチ場所が置かれていたことからも、「十勝」といった場合の原風景は、実は海岸沿いの川沿いや湿地を指すと思われる。

1897(明治30)年に河西支庁が置かれる前から、十勝川(当時は大津川)河口の大津港から、主として川船によって人や物資の輸送をおこない、帯広市一帯が開発されていった。屯田兵開拓にはよらず、民間開拓団「晩成社」をはじめ、数多くの大農場や団体入植があいつぎ、瞬く間に十勝平野は切り拓かれた。1881(明治14)年の樺戸監獄を皮切りに、北海道各地におかれた集治監いわゆる監獄も、囚人を労働力として北海道開拓の推進力となった。十勝においても1893(明治26)年の十勝分監開設にともない、道路、鉄道の敷設、建築など、さまざまなインフラ整備を、多大な犠牲の上に推し進めていった。

こうした平野部の開拓を推進していくため、丘陵地の森林は用材や燃料、さらには放牧地としても伐採されていった。1903(明治36)年から十勝にも鉄道が延びてくるが、枕木の用材としてカシワの天然林が大規模に伐採されるとともに、皮革産業へタンニンの供給源としても活用されている。

十勝の大規模な開拓は他地域に比較する